

追悼

鈴木英鷹先生を偲んで

言語聴覚学専攻 准教授
野村 和 樹

鈴木先生、先生の誠実に物事に向かわれる姿勢は決して忘れません。

鈴木英鷹先生の訃報を受け、先生との様々な思い出が走馬燈の如く駆け巡り、寂しさがこみ上げてまいりました。

先生に最後にお目にかかったのは、お亡くなりになるつい3週間ほど前のことで、先生がお帰りになる際に尼崎までご一緒したのが最後となってしまいました。

先生は、いつものような張りのある声ではなく、今年の夏に体調を崩され食が細くなられたことを話されました。しかし、しんどそうにされながらも夏に執筆された論文のことや、毎年発表されている精神医学史学会にエントリーされていた発表の内容、これからの研究計画、教え子の話し等もなさって下さいました。学生の話をお聴かせ頂いたときに「先生の元にはユニークな学生が集まりますね」と申し上げましたところ「学生ではないけれど、野村君が一番ユニークな存在」とおっしゃって下さいました。この時が最後になるとは、ましてや、私が先生の追悼文を書かせていただくことになるとは、思いもよらぬことでした。

鈴木先生との出会いは、私が大阪体育大学短期大学部に勤めた時で、先生はすでに短期大学部立ち上げの時から在職しておられました。

鈴木先生は、大阪体育大学短期大学部および大阪体育大学健康福祉学部の開校に従事され、その経験を生かし、本学開学に初年度から関わられ、本学の礎を築き上げられるのに尽力されました。臨床に関わる学部3校の開学に関わられたということは、精神医学の専門家としての仕事はもちろんのこと、教育・研究にとどまらず大学運営にまでも長けておいでになったということで、まさに鈴木先生の卓越した能力を示しているものと思います。また、これは先生が何事に対しても決して私心を優先せず、最善の方法を考えて物事に対処されてきた姿勢のあらわれだと思います。

本学におきましては、様々な委員会に所属され、中でも学習支援・国試対策委員会、学生相談室委員会では、初代委員長を務められました。

国試対策委員会におきましては、学生が国家試験に向け学内で自習できるようにと教室の確保に尽力され、また外部講師による国試対策講座を設けられる等、本学の国試対策を築き上げられました。また、学生相談室委員会においては、ハラスメントのガイドラインや学生相談室のパンフレットを作成され、学生が利用し易い相談室を設けられました。このように、学内の仕事においては、常に学生の立場を最優先にお考えでした。

ある学生が、先生の臨床の場である精神病院に実習に行くと聞くと、その病院に行かれる度にスー

パーヴァイザーはもちろんのこと、本学実習生ならびに他校の実習生にまでも声をかけるというような気配りをされ、陰日向から学生の支援をもなさっておいででした。

また鈴木先生は、その研究業績からも分かるように、広い視野のもとで精神医学に関わる様々な分野にわたる研究をされてきました。その成果を講義に反映され、常に学生に最先端の知識を教えてこられました。それは先生の業績の一つである『精神保健学』というテキストの執筆にも見られます。一年も欠かすことなく統計を直されるだけにとどまらず、法律、制度施策の改編、社会の情勢を見定められ、それに応じた改訂を毎年重ねてこられました。このテキストで学んだ学生も11期に及んでおります。

また、『食養手当て法』という著作を筆頭に「食事が心理面に及ぼす影響」、「砂糖摂取量と精神症状との相関」等の論文からも分かるように、食をテーマとして精神医学の領域から多くの業績を残されております。先生自ら、食べ物を大切にされながらも食べる物に関しては気をつかい召し上がっておりました。先生に幾度となくご馳走になりましたが、ご飯粒一粒まで必ず召し上がり、ご自身で召し上がらないものは、必ず「食べてくれるか?」とおっしゃり食べるものを残されることはありませんでした。

近年は、「江戸時代における精神神経疾患の位置づけ-薬の効能書による検討」や「古代の日本人の自殺について-『日本書紀』の自殺記事による検討」、また本紀要に掲載される「『日本三代実録』にみる医学記事について」という論文に見られるように、古文書を繙いて精神医学に関わる記録を抽出し検討を加えられるという、精神医学史の分野において先生独自の研究方法を確立されました。10月に開催されました第16回精神医学史学会においても「『禅病』の初出と陰陽五行からみた『禅病』の成り立ち」という仏典を資料に用いられるという研究でエントリーされておりました。発表の日を待たずして逝去され、聴衆もさることながら、先生には大変無念であったであろうと思われま

す。先生の業績を挙げますと、数限りなく続きます。本当に視野の広さ、懐の深さが業績からもうかがい知ることが出来ます。

私個人としましては、語り尽くせぬほどの事を先生と共有させて頂きました。そのどれを取りましても私には良い思い出であります。どの場面においても共通して先生から教えて頂いたことは、誠実な気持ちで私利私欲なく物事に向かうという姿勢です。このことを決して忘れることなく良い仕事を積み重ねて行きたいと思っております。

先生の訃報を周りの方々にお伝えする際に、それぞれの方から鈴木先生への思いをうかがいました。思わずその度に、その内容を先生にお伝えしようと考えている私がおりました。きっと私の中だけでなく、先生は多くの人々の中で生き続けておられると思っております。したがって、あえてお悔やみのお言葉は申し上げずにおきたいと思っております。先生、ありがとうございました。